《原　著》

虚血性心疾患における ATP 負荷 Thallium 心筋 SPECT の安全性と冠動脈病変診断能：半定量的方法による他負荷法との比較

石野　洋一*　　魚住富淑弥*　　中田　　肇*

* 産業医科大学放射線科学教室

要旨　アデノシン三燐酸 (ATP) 負荷タリウム心筋 SPECT の有用性に関して，副作用出現率と半定量的方法を含む診断能の面から検討した．対象は，虚血性心疾患およびその疑いで，ATP，ジピリダモール (DIP) および運動負荷心筋 SPECT が施行された 147 名 (男性 98 名，女性 49 名，年齢 42–83 歳) で，全例 SPECT 検査から 1 か月以内に冠動脈造影検査 (CAG) が施行されている．SPECT の画像評価法は視覚的に定性的評価を行い，負荷後早期像における集積低下・欠損の有無を判定するとともに，半定量的方法としてスコア法による評価を行い，同じく半定量的に重症度を判定した CAG 所見と対比した．ATP，DIP で何らかの副作用を認めた患者はそれぞれ 27 名 (46.7%)，4 名 (17.4%) であった．ATP 負荷において有意に出現頻度が高かったが，症状は全例速やかに消失し DIP のように遷延化する症例はなく，症状出現時にアミノフィリンなどの拮抗薬も必要としなかった．診断能に関しては視覚的評価法による冠動脈病変検出能，スコア法による半定量的評価法のいずれにおいても，ATP 負荷による SPECT は運動負荷法と同様良好な診断能を有することが確認できた．しかし，各負荷法とも LCX 支配域に関してはやや診断能が劣っており，正確な評価には問題を残す結果であった．ATP 負荷心筋 SPECT は運動負荷法に匹敵する診断能を有するとともに，作用機序や副作用の面からも DIP を凌ぐことが確認され，運動負荷の困難な症例においては有用な検査法であると思われた．

(核医学 **36**: 695–704, 1999)